

るためには地形を正確に把握する必要がある。このために空中写真を購入し、実体視で洞口附近の地形を検討した。しかし、これらの準備にもかかわらず、結果として、新潟地方を襲った豪雨のために、底部を究めずして4度の後退を余儀なくさせられた。

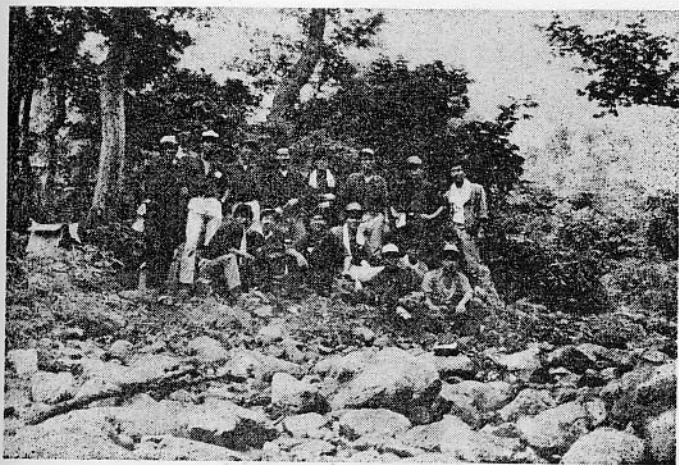
今回の挑戦を胸に誓いながらも、肩を落して洞口に背を向け、夕闇の迫るドリーネから消えて行く疲れ切った隊員の足元に、淡くキャブランプの光に照らし出された可憐な高山植物の黄色や紫が、今になってもなお目に焼ついて離れないのはなぜだろうか。一時的な感傷だろうか。これらの黄色や紫は過去4回我々を迎えそして見送ってくれた。そしてきっとまたその笑顔を見せてくれるだろう。いや見に行かねばならない。そのかぎりにおいて、我々はこの集団を忘れないし、それは意義あるものとして持続されていくにちがいない。青海千里洞、それは私にとって4年間の全てだった。彼が私に教えてくれたことは、日本記録ではなくて、彼が我々の最適の舞台であったということだった。

## 第5次青海千里洞調査

——これからの洞窟探検——

木 本 貴 夫

地理的に狭く、しかも高度に文明の発達したこの日本列島に探検と名のつく活動を求めるのは、闇夜を明りなしで歩くよりも困難であろう。日本の山地はことごとく踏破され、日本の河川は黒部川上廊下航行に成功した現在終末に近く、海底の探査も人間の力では軽石に等しい。地理的探検はその影を薄め、学術的探検も余地は少ない。このような状況下であり、なおかつ

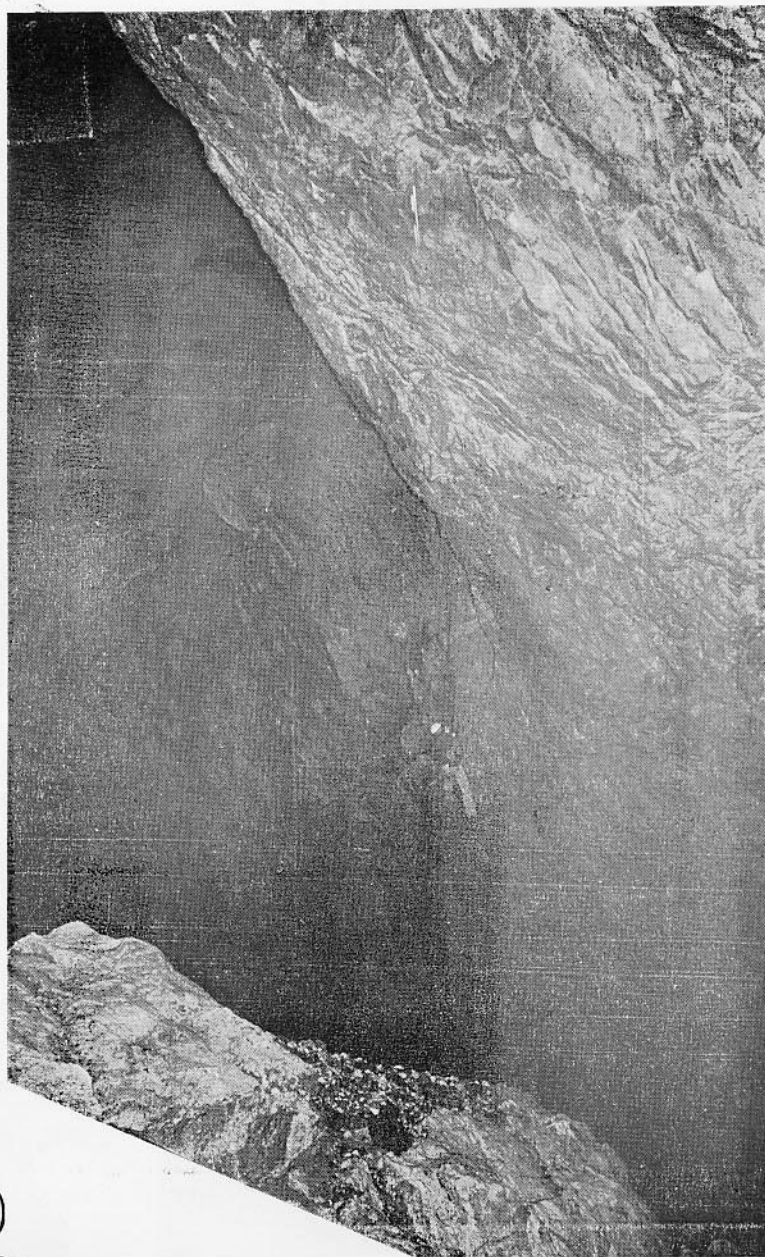


第5次青海千里洞調査隊員（ベース・キャンプにて）

国内に於いて探検活動を求めるには過去の調査資料を漁り、数多い綿密な机上探検を企て、実地での猛烈なブッシュ地帯を突き進む1歩後退、2歩前進のフロンティア精神が、以前よりもまして旺盛でないならば不可能であろう。特に洞窟を探検の対象とする活動に於いては、このことが不可欠である。3年前の昭和40年8月に発見した仮称「青海小穴」改名後「青海千里洞」も先輩達の以上のような実践があったからこそ、この地に於いて、現在でも私達の探検活動は日の目を見ているのである。

今回の第5次青海千里洞調査は新人を迎えた4月下旬頃に計画された。その計画の趣旨は、飽くまでも千里洞の全貌を解明することであり、そのためには、まず最深部アタックはもちろんのこと、洞内の生物や地質学的な調査もせねばならない。又測量や写真撮影等も必要である。そのアタック方法は、気象状況と隊員のコンディションの良い時に、一気に洞内キャンプ3泊4日を行ない最深部を極める云わばラッシュ・タクティック方式をとった。測量、写真撮影等調査活動もそれと平行して行なう。これは、昨年第4次調査の時のように地上で一旦集中豪雨を被むると洞内で饑餓にされてしまう危険性があるので、できるかぎり千里洞探検に当る期間を短かくせねばならないからである。私達はこのような千里洞探検技術を錬磨するため学舎の壁、裏六甲の百間滝と日々トレーニングを重ね、又千里洞模型を製作し、これを基にアタック方法を講じ、調査課題を検討して来た何をするにも隊員全員に「今度こそは千里洞の全貌を解明するんだ」という執念にも似た気魄が感じられた。私自身もこの3年間千里洞と共に学生生活を過してきたと言っても過言ではない。雨の降る夜はまるで自分が洞内に居るが如く茫然と闇を見つめたものである。しかし、千里洞へと血は踊るが、現実第5次調査計画を遂行する上で一つの大きな壁が立ちはだかっていた。その壁とは、私達の学生探検活動に於いては『絶対に事故を起してはならない』という鉄則である。語弊があるかもしれないが、この鉄則があるが故に私達の計画は遅々として進まず、明けても暮れても大阪の中で千里洞探検を繰り返したのである。すなわち、常にこの鉄則様は私達を叱咤したのである。「隊員構成は十分か?」「装備は手を抜いたらあかんぞ」。「お前等の力ではまだあかん。考えが甘い!」。私達は鉄則様に衝突したこともあった。「生命保険を掛けたら心配いらんやろ!」と。しかし、たとえアイガー北壁登攀に成功しても仲間が死んでしまったらたしてそれを喜べるだろうか。同じテントの下で一つのナベのメシを食う云わば兄弟同様の仲間が死んでしまったら、たとえ千里洞の全貌を解明したところで喜べるはずがない。私達はこの壁に登切るために以前よりもまして激しいトレーニングを重ねた。例えば千里洞「孤独の滝」を想定して、どの位の水量迄が昇降可能であるかを知るために実際の滝昇りをも行なった。又第5次調査に出発する前日迄4日間大学外苑にて強化合宿を行ない、万一不慮の事故

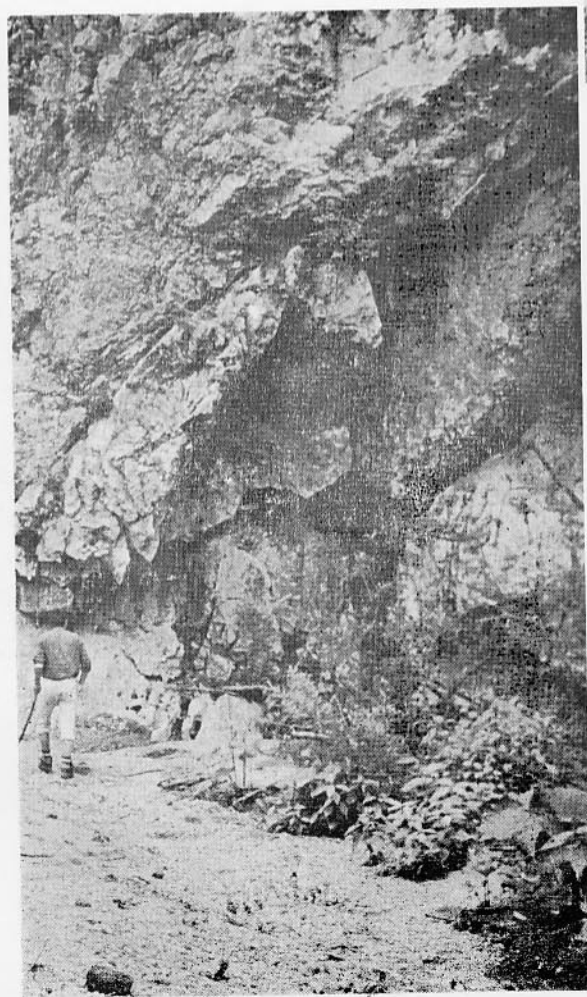
右 孤独の滝を下降する  
隊員  
(第Ⅲホールにて)



下 ローソクの火を囲  
みながらのミーテ  
ィング  
(第Ⅲホール アタ  
ツクキャンプにて)



右 切立つ浄土門  
マイコミ平の降水は  
かつては地下を流れず  
地表を流れていた  
その名残りが数十mもある  
この岩壁である



左 大マイコミ  
降雨時には龍大な水量を  
吸い込む

が起った場合の救助対策をも講じた。もちろんこれで事故に対する万全を期したとは思っていない。ただ、第5次調査隊の力の限界を知り、又隊員一人一人にとっても自分の力を知り得たことで意義があったと思う。

8月3日からの第5次調査は、このような事前の心配とはよそに順調に進んだ。そして遂に8日午後3時千里洞最深部を極めたのである。地上より延べ垂直405mであり、堅穴洞窟に於ける日本最深記録である。実に4年目、5度にして私達は千里洞に打ち勝ったのである。しかし、地底アタックには成功したが、まだ千里洞内には調査すべき余地は多い。まず千里洞より福来口に続いていると思われる「幻の大横穴」と闇に現われ闇に消える地下水流の行方は今後の最大の調査課題となろう。なお秘境マイコミ平には他にも数限りない探検の対象となるものが現存している。新しく見つけた銀鳳洞。龐大な水量を吸い込んでいる大マイコミ。「大穴」……。これらの未知なる闇の世界に一条の光をさすためには、千里洞探検技術は十分に活かされるであろうし、又、千里洞を克服した自信たるやこれにまさる武器はなかろう。しかし、これに酔ってばかりいては、私達の新しい目標とする「幻の大横穴」の解明は到底無理だろう。そこには岩壁あり、渦巻くプールあり、奔流する地下水もある。これを突き進むためには山岳技術はもちろんのこと潜水技術やボートの技術が必要となろう。又学術的には、生物、地質や気象等の科学的知識もより以上に身につけなければならない。云わば洞穴探検とは総合的探検であり、洞穴学とは総合的な学問である。もっとも私達は探検家を目指しているのではなく、飽くまでも探検を通じての人間形成である。私達の探検活動は、単なる専門家への資料提供だけでも良いと思う。ただどの資料が価値があるのかを判別できる位の知識は必要である。私達は、この秘境マイコミ平の解明がどんなに困難であろうと、そして何年かかろうとも千里洞探検に傾けた以上の情熱をもって取組んで行くつもりです。又一方東南アジアをはじめとして海外にも目を転じ、日本の洞穴学及びケイビングへ貢献すべくがんばるつもりです。

※ ※ ※ ※ ※

※ ※ ※ ※ ※